

「新川の由来 —江曾島の田畑を潤すために—

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司

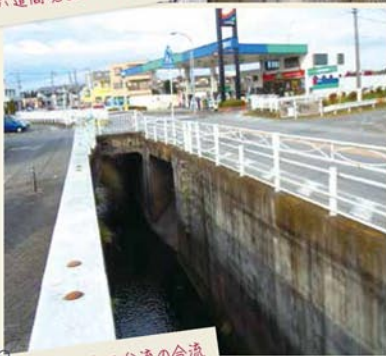
宇都宮市街地の西側を北から南に流れる用水路を新川という。明治初期に開削された人工の川である。旧宇都宮城下の西側縁辺を流れるが、水源がどこで、どこに流れ下り、どのような目的で開削されたのかを知る市民は存外少ない。

新川の上流は、宝木用水である。宝木用水は、宇都宮北西部台地に寛文十(二六七〇)年以降できた足次・高谷林・藤岡・仁良塚・野沢・西岡・山崎・細谷・江黒・中丸の西原十カ新田を潤すために開削された用水である。西原十カ新田のある台地は火山灰が厚く堆積し、地表水が得にくい上に地下水位が深く、開拓以来水利に恵まれずにいた。そこで田川の水に着目し、水を引こうとしたのである。宝木用水が完成したのは、安政六(一八五九)年で、二宮尊徳の弟子吉良八郎等の監督による。徳次郎堰から中丸の溜池に至



六道間屋敷裏を流れる

る延長三里(二キロメートル)のものであった。この宝木用水に着目した者がいた。宇都宮市南部の江曾島の農民飯塚政蔵等である。江曾島は、西原十カ新田等と同じ宝木台地に立地した集落であり、水に乏しい土地であった。西半分の地は、滝谷町の滝尾神社境内の湧水と神社の downstream 二キロメートルの地にある西溜の湧水を合せた水を水源として利用、東半分の地はカワラケ沼の水を水源としていた。しかし両水源とも水量に乏しく日照りが長く続くと枯れてしまうという状態であった。明治十年代に入り、飯塚政蔵等は水不足による村の疲弊立て直しを図り、宝木用水からの引水を考えた。明治一八(一八八五)年、飯塚政蔵等は、仁良塚の岩崎団吉等に宝木用水からの延長を申請。同二七(一八九四)年、西岡(現宝木本町)以南において五カ組との末流引用契約を締結し江曾島までの水路を開削した。これが現在の新川である。



江曾島での東西分流の合流

前述したように新川の上流は宝木用水である。新川と呼ばれる区間は、宝木本町地先から下流、戸祭小東側・宇女高校庭を横切り、六道に至り、ここで東西に分かれる。西分流は六道通り沿いを流れ、滝谷町で滝尾神社湧水と合流。その後は従来の水路を流れ陽南小東側、アビタの西側を経て江曾島南部で東分流と合流。一方東分流は西原小の西側から富士重工宇都宮事業所敷地を貫流、陽南中東側付近で従来の水路を流れ下り西分流と合流、さらに富士見町で他の小河川と合流する。ここまですが新川の区間であり、延長約一七キロメートルである。なお、その先は下野市下古山で姿川と合流する。

新川は江曾島の農民のための農業用水として開削されたが、川沿いの住民にとっても利便性の高いものであった。屋敷の中には水路に洗い場を設け、農具や野菜等を洗った。また、所々に水路に下る道を作り、その先に洗い場を設置し、農耕で汚れた馬の体を洗い、暮れには障子を洗ったものである。この他に、水車等を設置し米搗きや粉挽きに利用した家もあった。

こうして江曾島の農民や付近の農民に利用された新川であったが、昭和四十年代に入るとその役目を終えた。一時は生活排水が溢れることもあった。現在は大半がコンクリート化され、暗渠化された部分もある。何となく邪魔者扱いされている新川、再び市民に親しまれる川としたいものである。